

「日本文化の雑種性」の成立について

The Birth of “Japan as Hybrid Culture”

半田 侑子*

はじめに

「日本文化の雑種性」とは、加藤周一が三年余りに及ぶフランス留学（1951年11月—1955年1月）から帰国してまもなく発表した論考である。その内容は「日本の文化が雑種的であることは、今の日本の文化の枝葉に西洋の影響があるということではなく、今の日本の文化の根本がぬきさしならぬ形で伝統的な文化と外来の文化との双方から養われているということ」¹⁾を指摘した上で「ほんとうの問題は、文化の雑種性そのものに積極的な意味をみとめ、それをそのまま生かしてゆくときにどういう可能性があるかということであろう」²⁾と、日本の文化を「雑種」であるとして、その雑種性にこそ希望を見出そうとするものであった。

1955年3月フランス留学から帰国したばかりの加藤は、同年の『思想』6月号（第372号）に「日本文化の雑種性」を、これに続く論考として「雑種的日本文化の課題」（のちに「雑種的日本文化の希望」と改題）をおよそ1ヶ月後の中央公論7月号（第70巻7号）に発表した。その目次には「公式的批判に對して、思想そのものの成立から説明し内在的批判を加える」とあり、「日本文化の雑種性」掲載当時の反響の大きさがうかがえる。「日本文化の雑種性」は当時の加藤の代表的な論考として広く読まれ、同時に、その後の加藤の名著『日本文学史序説』（上1975年、下1980年、筑摩書房）、『日本文

* 衣笠総合研究機構研究員

化における時間と空間』(2007年、岩波書店)に先行する、加藤にとっても転換点となった論考である。

「日本文化の雑種性」が収録された単行本『雑種文化——日本の小さな希望』(大日本雄弁会講談社、1956)刊行の際に、梅棹忠夫は「これは本ものの日本文化論だ」として、「日本文化の雑種性」と「雑種的日本文化の希望」を高く評価した。

文化ということばは新語だ。下に「日本の小さな希望」という副題がついているので、雑種文化とは日本の文化のことであると察しがつく。雑種とか小さいとかいうことばは、いくらかは自嘲的なひびきをもっている。

しかし、この本はお説教の本ではない。これは本ものの日本文化論だ。希望的観測も、無用の劣等感もない。冷静に、着実に、日本文化の特質と問題点、そして未来の可能性が論じてある。一口でいうなら、日本人の日本文化論としては、いちじるしくドライである。

十二篇の論文から成っているが、「日本文化の雑種性」と「雑種的日本文化の希望」の二篇が断然光っている。著者は、日本文化を雑種であるという。今の日本の文化は、枝葉において西洋の影響をうけているというのではなく、根本において伝統文化と外来文化の両方から養われているのだという。そのどちらか一方に純粹化しようという動きが、まえからあるけれど、どちらも枝葉のかり込み作業にすぎない。雑種性を直視して、その積極的な意味をみとめるべきだ、というのである。出発点と方向の正しさもさることながら、著者の論理の着実さと精密さはしっかりしたものの考え方のお手本とも言うべきものだ。³⁾

梅棹忠夫はその翌年1957年の『中央公論』に「文明の生態史観」を発表し、加藤の『雑種文化』としばしば比較されることになる。⁴⁾

一方で「日本文化の雑種性」は長い間、誤解され続けてきた論考である。

「日本文化の雑種性」が問題にしたのは、「明治以後の日本の文化に西洋の及ぼした影響」が「文化の根幹にまで浸みこんでいるということ」⁵⁾だ。樋口陽一が、2019年に行われた生誕百年記念シンポジウムの講演録「加藤周一は「洋学紳士」か、それとも「日本人論者」か?」において「「雑種性」という表現に加藤が託した内容を彼自身がのちにより明快に定式化したところに従えば、それは、「文化の枝葉」ではなく「今の日本の文化の根本がぬきさしならぬ形で伝統的な文化と外来の文化との双方から養われているということ」(『著作集』第七巻、四六頁註1)に他ならない」⁶⁾と引用したとおりである。

例えば松沢弘陽が「天賦人權論争覚え書」(『家永三郎教授東京教育大学退官記念論集2 近代日本の国家と思想』三省堂、1979 初出)において「明治啓蒙思想の中に天賦人權論が生まれる背景には、幕末以後変容を重ねてゆく儒教に、横あいから打ちこんで来た西洋思想、とくにその中に流れる多分に自然神学的な色彩を帯びたキリスト教、さらに功利主義・快楽主義までが影響するという事情があった」⁷⁾と述べるごとく、日本化した儒教が西洋文化と接触するので二重の構造になっているが、明治以降の日本の思想に西洋思想が与えた影響は大きい。しかし一方で、西洋思想は17世紀以後、日本思想と同程度の衝撃を外来思想から受けたとは言えない。加藤が英仏を「純粋種」、日本を「雑種」と、鷲巢力の言葉を借りれば「挑発的」に表現し⁸⁾、主張した内容は、17世紀以降の英仏文化と明治以降の日本文化の比較を軸にした、「日本文化の純粋化運動」へのアンチテーゼだった。

「日本文化の純粋化運動」が指す方向は二つある。一つは西洋的なものを削ぎ落とす日本の「伝統」回帰の方向である。もう一つは日本的なものを削ぎ落とした日本の完全な西洋化である。純粋とは、不純物の混じっていない、混じりけのないことを指すが、「日本文化の雑種性」において加藤は、この二種類の純粋化を両者ともに否定する。そして、明治以降の日本文化は

根茎から西洋文化との雑種であり、西洋文化の影響、あるいは日本文化の影響を取り除き、純粋な日本の文化をうちたてることはもはや不可能である、それよりも、雑種としての日本文化を肯定し発展させることにこそ、西洋とは異なる希望があるのではないかという立場を表明した。

このような加藤の論に対し、いまだに「基本的に、あらゆる文化は雑種である」という反論が返ってくることがあるが⁹⁾、上記に述べたことを踏まえ、本稿では、加藤が「雑種文化論」を発表するに至るまでの道筋を、1950年代を中心にして確認し「雑種文化論」の持つ意義を再考したい。

第1章「日本文化の雑種性」における「雑種」

1979年に平凡社より刊行された『加藤周一著作集第7巻』に「日本文化の雑種性」が収録された際の「追記」には「あらゆる文化は雑種である」という反論への加藤の応答が書かれる。「日本文化の雑種性」を発表した当時から、「純粋種」「雑種」という言葉の使用についての批判があった。それに対して加藤も79年追記において「私のいう雑種性は、日本文化だけの問題にかぎらない、という意見も聞いた」と述べる。

たしかに、私が純粋種とした英仏の文化にしても、それぞれの土着文化の上にギリシア・ローマの古代文明やキリスト教の影響が重なって出来上がったものである。しかしそれは古い話で、いわば英仏の文化の起源の問題である。一七世紀以後をみれば、英仏の社会が、外国から主要な政治社会制度や基本的な概念の大多数をとり入れるということはなかった¹⁰⁾。

また、「雑種」という言葉の持つイメージが、この論考が誤解されやすいことのひとつの原因でもある。そのため加藤は「雑種文化」論についてくり

かえし説明しているが、そのうちの一つに1956年『三田文学』12月号に掲載された座談会「東西文学の距離—日本文学の特質をめぐって—」がある。

以下は座談会における加藤の発言である。

明治以前の日本の文化が、はじめ外国の影響から出発したものであるという意味での日本の文化の雑種性は、日本に固有なものではない。

そういう意味ではフランスでもそうだし、ラテン文化が入ってきた時もそうだ。ところが、明治文化というのは中国が入ってきて、いくらか日本化して、高度な文化に達して、非常に大ざっぱな意味で言えば中国文化圏の中の一つの個性の強い局所的な文化でしょう。それと系統の全然違う歴史的背景を担って出てきた文化とがぶつかっている。両方が高度の文化で、それが混っている。ですから、比喩的に言えば、接木した外国の文化は切り落せば純粋なものになるが、そうでなく根から種がかけ合せてであると、切り取るのが不可能で、西欧的な枝を切り落すと何年か経つとまた出てくる。日本風のものも、杖を切り落すと何年か経つとまた生える。根本的に種が二つ入っていることが明治以後の日本の特徴だと言いたい。とは言うものの、程度問題です。

だから純粋な文化はどこにもない。方々から影響を受けて成り立っているが日本の場合その度合があまり激しいのと、二つの系統の起源が全く違っている。そういう例はちょっとないと思う。¹¹⁾

しかし、先述の通り、「雑種」への誤解は今日も根強い。

「雑種」への反応として、例えば菅野昭正が、加藤のいう「雑種」を理解しつつも、「融合」や「混合」のほうが通りがよいのでは、との感想を抱くことは、誤解を避けたほうがよいという意味では真っ当なことだろう。しかし「雑種」という言葉が想起させる印象を鑑みると、加藤が意識的にこの言葉を拵んだ意図は明白である。

「雑種」という用語に、当初、私は疑念を感じていました。動物、植物に関してこの言葉が使われる場合、たとえば雑種の犬というように、通常は貶められた意味になることが多い。そういう反応を見越していたのか、加藤さんはこの言葉に「よい意味もわるい意味もあたえない」と断っておられます。いわば意味論的に中立のところを置いたわけですが、「雑種」がとくに選ばれたのは、この日本文化論の焦点が「純粋種」との対比に合わされているからだと分って、疑念はやがて薄らぎました。それでも、融合とか混合と命名するほうが通りがよいのではないかという思いが、多少とも残ったのも事実です〔……〕。¹²⁾

菅野が「雑種」を理解する手がかりとしたのは『20世紀の自画像』（筑摩書房、2005）に収録された成田龍一との対談である。晩年の2002年に至って、加藤は「雑種文化」をサラダ・ポウルとメルティング・ポットの例えを用いて説明した。

「雑種」という言葉、確かに使ったんですが、雑種じゃないものは何かというと、一つは「接ぎ木」でしょう。日本文化の木があって、そこに外国の大事なところを加えると接ぎ木で、切り落とそうと思えばそこだけ切り落とせて、もとの木の幹は全然変わっていなくてもそのまま。別の比喩を使えば、本来、アメリカ文化について使われた「サラダ・ポウル」です。

サラダはニンジンとかタマネギとかいろいろ入っているでしょう。でもニンジンの嫌いな人は、ピンセットでニンジンをとり出して捨てることができます。サラダは混在しているけれども、ニンジンはあくまで純粋なニンジンで、タマネギはタマネギですから。ところが、それをスープに煮込んでしまうと、溶けて混じっちゃって、ニンジンの味がするからいやだといってもそれだけピンセットでとり出すわけにいかないんで

す。そういう融合したものを英語では「メルティング・ポット」。私の言う雑種です。¹³⁾

サラダ・ボウルなら嫌いな野菜をつまみだせるが、メルティング・ポットであれば、さまざまな野菜が溶け合い、嫌いな野菜だけつまみだすことはできない。加藤によれば、このメルティング・ポットの状態が「雑種」である。

加藤が「雑種」は「接ぎ木」ではないと強調していることも、注目すべきである。後述するが、加藤も敗戦後まもなく日本文化を「接ぎ木」だと表現したことがあるのだ。

第2章 日本の民主主義と「雑種文化」

1. 「日本のナショナリズム」と「日本文化の雑種性」

1951年1月『中央公論』に丸山眞男が発表した「日本のナショナリズム」は「日本文化の雑種性」前夜の論文として参照されるべきであろう。

ところで、前期的ナショナリズムの担い手としての旧特権層は実際にヨーロッパ世界の圧倒的に優越した産業・技術・軍備に直面して見ると、古い世界を新しい世界に対して防衛するという彼等の目的を達成するために、自らを「敵」の文明で武装せねばならぬということを否応なく意識させられた。ところがそこには異常に困難な問題が伏在していた。なぜならば、ヨーロッパ文明を取り入れないでは、もはや支配層は古い世界自体を維持できないにもかかわらず、それをまた全面的に取り入れることは旧い体制の根本的な変革を結果し、従って彼等自身の権力の没落を招来するからである。このパラドックスから脱出する方法は、ただ一つしかなかった。すなわち、ヨーロッパ文明の採用を産業・技術・軍備等いわゆる「物質文明」に限定して、キリスト教とか個人主義・

自由民主主義といった思想的政治的諸原理の浸潤を最小限度に防遏することがこれである。この使い分けは橋本左内の「器械芸術彼に取り、仁義忠孝我に存す」、或は佐久間象山の「東洋道德、西洋芸術」（芸術とはむろん技術の意である）というような言葉に古典的に表現されている。しかもこの使い分けにすら容易ならぬ問題が存することは見易い理である。なぜなら、いわゆる物質文明がしかく簡単にそれをはぐくんだ近代精神と分離できないだけでなく、できたとしても物質的生活環境の近代化が思想や意識に逆作用するのを喰いとめるということは極めて困難だからである。中国と日本との歴史的運命の岐路、従ってまた両国のナショナリズムの発展形態の巨大な差異は、まさにこの歴史的試煉に対する両国の旧支配階級の反応の仕方に歴胎しているのである。¹⁴⁾

丸山は、日本のナショナリズムと近代化について、「物質文明」の積極的な輸入と、思想的政治的諸原理の「浸潤を最小限度に防遏すること」を「使い分け」として指摘した。この「使い分け」とは「和魂洋才」に通ずる立場であろう。さらに丸山は、ここから日本と中国の近代化の出発点の差異が「結局両国のナショナリズムに殆ど対蹠的な刻印を与え、それが今日の事態にも致命的に影響している」と述べる。日本の近代化と中国の近代化の比較は本稿で触れる余地がないが、この観点は「日本文化の雑種性」が日本のみならず東アジアにおいても論じられるべき課題である、という生誕百年記念講演録『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』第二部で確認された立場に通じる。

「日本におけるナショナリズム」において重要であるのは、引用部分にもあるように、「物質文明」の輸入と、制限された思想的・政治的諸原理の「使い分け」のひずみが日本社会の問題であるという丸山の指摘である。「頂点のはつねに世界の最尖端を競い、底辺には伝統の様式が強靱に根を張るという日本社会の不均衡性の構造法則はナショナリズムのイデオロギー自体のな

かにも貫徹した」¹⁵⁾と丸山は述べる。そして「日本文化の雑種性」において、丸山の「使い分け」の指摘は「和魂洋才」の孕む矛盾として表現される。

和魂洋才という原理は文明開化のはじめの時期のようにもはや簡単には成立しない。和魂は意識的にまもらなければならないものとなり、しかも純技術的な領域以外のあらゆる西洋化に対立することによってしかまもりえないものとなる。日本文化を純粹化しようとする運動の一つの型としての国民主義は、そのときはじめてあらわれるわけだ。そして一つの型のあらわれるときは、同時にもうひとつの型のあらわれるときである。なぜなら技術制度の輸入の次には、輸入された技術制度の生みだした社会のなかで生きてゆくために必要な思想の輸入がはじまるからである。洋才と和魂との矛盾が洋魂の理解を刺戟し、するどく国民主義と対立しながら、日本の文化をひろく西洋化しようとする運動となってあらわれる。¹⁶⁾

19世紀東アジア地域に迫った帝国列強の侵略の危機と、それに対抗するため程度の差こそあれ、せきたてられるように近代化を図ったことは、東アジア地域の文化に大きな変化をもたらした。その変化は殊に日本において急激で、技術や制度だけでなく、建築や衣服、食事といった、生活に関わる部分にまで西洋文化の波が及んだのである。産業革命を生み出し自ら近代主義を胚胎させたイギリスそしてフランスは、技術面では西洋を「お手本」として吸収しなければならなかった日本のごとく、全く異なる文化の輸入を経ない。この輸入は丸山の指摘するように制限つきであるが。これが加藤のいう「雑種」と「純粹」の分かれ目である。だからこそ、「雑種文化」の問題は日本のみならず、中国、韓国の問題でもあり得る。

そこで丸山の指摘する「物質文明」の輸入と、制限された思想的・政治的諸原理の「使い分け」のひずみは、日本における民主主義のありようと大き

く関わる。自前の民主主義を持たなかった日本は、民主主義を西洋から輸入しなければならなかった。例えば、憲法学者の樋口陽一は近代化と「和魂洋才」に関して以下のように述べる。

「洋才」というコトバを明治の開国日本に即して譬えて言えば、工場と軍艦ということになろう。しかし、かつて「和魂漢才」と言われていたとき、人は、中国文明にもっと全面的に対面していたはずである（衣服は中国風にならなくても漢字から仏教まで）。幕末から明治にかけての日本の指導層にしても、工場と軍艦だけではないもう一つの洋才——国会開設と西洋に準じた法制度の整備、など——を取り入れることなしには富国強兵という最大目的の達成も不可能だ、という認識があった。明治国家をデザインする中枢頭脳にとって「凡ソ立憲ノ政ニ於テ君主ハ臣民ノ良心ノ自由ニ干渉セズ」（井上毅）という原則であり、その実態は「日本を包む空気の中には立憲政治の今とても〔……〕人間意思の自由、思想の解放には悪意を持つてゐるらしいやうに思はれてならぬ処がある」（永井荷風）と慨嘆されるにしても、である。

そして「立憲政治」という洋才は、実は「洋魂」——加藤の言い回しに戻って言えば「個人の尊厳と平等」——と全く無縁なものであり続けさせるわけにはゆかぬ、厄介なものなのであった。¹⁷⁾

樋口が「立憲政治」という洋才は、実は「洋魂」——加藤の言い回しに戻って言えば「個人の尊厳と平等」——と全く無縁なものであり続けさせるわけにはゆかぬ、厄介なものなのであった」と指摘するところは、先述した丸山の「使い分け」の問題に通ずる。丸山によると「ヨーロッパ文明を取り入れないでは、もはや支配層は古い世界自体を維持できないにもかかわらず、それをまた全面的に取り入れることは旧い体制の根本的な変革を結果し、従って彼等自身の権力の没落を招来する」¹⁸⁾ので、支配層は自らの没落

を避けるため、「洋魂」の輸入を制限し「和魂洋才」を説いた。しかし樋口のいうように「洋魂」と「洋才」は全く無縁なものであり続けるわけにはいかない。「洋才」という、近代国家に必要な技術や制度のみ輸入し、「洋魂」または「個人の尊厳と平等」の輸入を制限することは不可能であった。「西洋かぶれ」や近代主義者などと呼ばれながら、加藤が西洋文化に徹底して向き合ったことも、日本の民主主義をいかに育むかという課題が念頭にあったからであろう。加藤が「日本文化の雑種性」を執筆した際、民主主義について言及することは当然であった。

丸山と加藤の関係について付言すれば、のちに丸山は『日本の思想』で「日本文化の雑種性」を批判し、日本文化は雑種でなく雑居であると主張した。その後の丸山による日本文化論——日本文化の原型（プロトタイプ）、古層、basso ostinatoなどを論ずる一連の論考——は加藤と同じ問題意識を共有している。その延長線上に丸山と加藤の共同の仕事『翻訳と日本の近代』（岩波新書、1998）も実現したのである。現在も「# MeToo」や「LGBTQ +」、「SDGs」など、我々がそれらを我々の言語として日本語で表現できずにいることはいうまでもない。

2. 「日本文化の雑種性」発表当時の状況

「日本文化の雑種性」は『思想』1955年6月号において、「《日本文化について》」という特集の5本の論文の中のひとつとして発表された。加藤を含む掲載論文や執筆者、掲載順は以下の通りである。

- (1) 杉捷夫「日本文化論の推進のために」
- (2) 加藤周一「日本文化の雑種性」
- (3) 手塚富雄「現在の日本文化の問題点」
- (4) 青山秀夫「機械時代と日本」
- (5) 雀部高雄「日本の科学・技術と日本の文化」

このうち、冒頭の杉による「日本文化論の推進のために」は、「日本文化

に関する発言が最近急に目立って多くなったように思う。いくつかの根本的な提案や反省がすでになされている」¹⁹⁾ という一文から始まり、数本の関連する論文を挙げている。杉が最初に挙げた務台理作『日本の自立と人類の概念——自立のための文化問題の考察』を見ると、務台論文の端緒が同年『世界』10月号(第106号)の「日本経済自立のために」という特集にあることがわかる。『『世界』十月特集号において、日本の自立は経済的自立を根本条件とするものであり、平和の問題も経済的自立の形において考えるべきだという意見が高調された』²⁰⁾ ことを前提に、務台は「日本の自立が経済的自立に支えられると云うのは当然であるが、同時に日本人の生活から見れば、日本の自立は文化の向上とひきはなし得ないことも当然であろう。〔……〕日本の経済的自立をほんとうになしとげるためには、日本人の生活意識を根本的に改造する必要がある、そのため自立的に文化意識をもり上げることは大いに必要ではないかと思われる」²¹⁾ と文化についての問題意識を述べる。その後、『世界』1955年1月号(第109号)には「日本文化についての提案」という特集が生まれ、野間宏、石母田正、木下順二が筆をとっていることは杉が「日本文化論の推進のために」において述べる通りである。この時期に日本文化が盛んに論じられたことがわかる。加藤の「日本文化の雑種性」は、1952年4月のサンフランシスコ条約による主権回復の後、日本の政治的・経済的・文化的な自立を求める文脈のなかで、日本文化を論ずる特集のひとつとして掲載されたのだ。このような時代背景のなかで発表された「日本文化の雑種性」は、当然のことながら、民主主義の輸入を雑種性の文脈で捉えようと試みている。

先述の『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』に収録される樋口陽一「加藤周一は「洋学紳士」か、それとも「日本人論」者か？」や、山元一「文化・人権・立憲主義」の樋口と立場を異にする論考も、「雑種文化」論と関連して日本における民主主義を論ずることが主眼である。山元は「日本文化の雑種性」から発展する課題として、加藤が世界人権宣言をペニシリンの発明に

喩えたことを例に挙げ、「人権の国家超越性・普遍的性格を強調し、とりわけ人権価値の普遍性を「ペニシリン」になぞらえて科学技術の有用性の問題に還元した」²²⁾と評し批判的に検証を加える。

3. 加藤周一は「西洋かぶれ」か

日本では先述の通り 1952 年 4 月にサンフランシスコ条約によって主権を回復して以来、「憲法改正」と再軍備の必要性が政治的課題としてのぼってきた。加藤が「日本文化の雑種性」を発表した 1955 年は敗戦十年の節目の年である。55 年 3 月には第二次鳩山一郎内閣が発足していた。鳩山一郎も「憲法改正」、再軍備、対ソ連、中国などの共産国との国交回復を主張したが、「憲法改正」には議席が足りずに断念せざるを得なかった。

この時代と「雑種文化論」について加藤自身は、次のように述べている。

おさらい風に整理すると、一九五〇年代に日本の情勢は大きく変わります。朝鮮戦争が一九五〇年からはじまり、五二年に保安隊ができ、五四年に自衛隊法が通ります。警察予備隊、保安隊、自衛隊と、いわゆる再軍備が徐々に進みますが、他方、この時代になると「言論の自由」も保障されるようになる。

その頃、私は初めて具体的に日本を外から見る機会をもった。しかも、それは冷戦の真最中、朝鮮戦争の最中です。日本は米国に従っていますから、戦争の当事者です。反対側は中国、北朝鮮それからソ連。私は朝鮮半島における戦争の一方の側の世界にとにかく住んでいた。それが初めてフランスへ行った。フランスはどちらでもない第三地域です。朝鮮戦争というものを第三者の立場から見る事ができたというのは、たいへんありがたかった点でした。

日本がだんだん再軍備をしていく、いわゆる逆コースの過程の大筋は、はっきり見えていました。中にいるよりもかえってよく見えたと思

います。はっきりときれいな線である方向に動いていった。外に暮らしていると、長期的にもものを見る傾向が出てくる。この五年間、一〇年間の動きというのではなくて、日本の歴史というものをヨーロッパの歴史と対比したときにどういう意味があるかを考えたいと思うようになりました。日本を時間的に長い期間として見て、日本の文化というものを見つめたいと考えた。

だから、私が入る「雑種文化論」というのは、逆コースなどの五〇年代の動きとは直接かかわっていない。悲観的な将来とか楽観的な将来というのではなくて、できるかぎり客観的に、どういう利点があって、どういう弱点があるかということを見極めたいと考えたのが雑種文化論です。その可能性の提示から楽観的な気分を引き出す人も、ああこれだけかというので悲観的な結論を引き出す人もいました。

ただ、その当時は、どちらかといえば、ヨーロッパ、米国が進んでいて日本は遅れているとか混乱しているとか、そういう考え方が一般には強かった。私はそうした風潮に乗らないように、必ずしもマイナスだけではないということをおうという潜在的な気分はありました。

それもフランス滞在で得た経験がきわめて大事でした。つまり、本で読んで得た知識と実際に生活した経験と、両方から見た西洋というものは極楽であるはずはないということです。どこの社会でもそうです。黒い面と白い面、利点と弱点と両方を感じる。圧倒的にヨーロッパだけがいいという考え方は克服されると思う。²³⁾

この文章からは、渡仏の経験が、加藤を「西洋かぶれ」というよりも、むしろ逆の方向へ歩ませたことがわかる。それにもかかわらず、加藤について一般に流布したイメージは「西洋かぶれ」であった。その原因はおそらく、敗戦後まもなく中村真一郎、福永武彦と共に発表した『1946・文学的考察』（真善美社、1947）にあるのではないだろうか。樋口陽一はこの時期の加藤

の態度を「日本的なるものへの呪詛」と表現する。

一九四五年をはさむ時期に書かれた日本的なるものへの呪詛は、『万葉集』や『源氏物語』を「世界一流の文芸作品」とする国文学者の「迷信」を切って捨てて見せるほどのものだった（『1946・文学的考察』）。それはなるほど、「西洋かぶれ」の青年を想像させるかもしれない。しかしその同じ時期に同じ本の中で『金槐集』へのオマージュが語られており、それどころか、医学部学生加藤がすでに、長文の実朝論を公にしていた（『加藤周一 青春ノート』二二七頁以下、及び編者による註1）。「日本の庭」が書かれているのも、足かけ四年に及ぶヨーロッパ体験に先立ってのことだった。²⁴⁾

敗戦から、加藤が留学する直前にかけて、日本文化がどのように論じられていたかについて、中村真一郎のインタビューがひとつの証言として挙げられる。

大体、ぼく自身戦後、日本の伝統に対する態度では孤独だった——と云うのは、戦後すぐ、桑原武夫の文学論などで、日本の文学の伝統からは、うるどころは大してない。断絶してしまつて、積極的に外国文学を学べと云う主張が一般的になつてきていたが、そのころぼくは、日本の古典にある民衆の夢の追い方の伝統と云うものを注意し始めていた。木下君は夕鶴あたりで、民話の中にあるそれを生かしていると思えるね。²⁵⁾

桑原武夫は敗戦後すぐに「第二芸術」（『世界』1946年11月号、岩波書店）を發表し、フランスの小説や詩などと俳句を比較し、名家と呼ばれる俳人と素人の俳句の区別の容易につかぬ事を指摘した。また『文学入門』（岩波書店、1950）において以下のように述べる。

〔……〕近代小説を味わうためには、まず西洋の近代小説の傑作を読むべきだと考えたことである。事実、全世界の近代小説は、中國のもの、日本のものも、すべてヨーロッパの近代小説の影響のもとに生まれたものである。ヨーロッパ以外にも、『千一夜物語』とか、『水滸傳』『三國志』とか、『源氏物語』、西鶴とか、すぐれたものがあるが、これらは近代小説とは根本的にその性格を異にしており、たとえこれらのものの影響下に書かれた小説があるとしても、もしその作者が西洋近代小説の精神の洗礼をうけていないとするならば、その作品は現代の小説としてはつまらぬものだ、とって恐らく間違いはないだろう。²⁶⁾

「西洋近代小説の精神の洗礼」をうけていることを「現代の小説」の必要条件とする、桑原の近代小説に関するこの主張は当時の「近代主義者」の印象の一面をよく示すものであろう。加藤と同様に旧制第一高等学校時代には五味智英が指導する「万葉集輪講」の会に出席し、マチネ・ポエティクの詩作活動も共にしていた中村真一郎の桑原に対する感想は、その点において興味深い。

加藤についていえば、戦時中、日本の古典文学が国威発揚のために利用されたことは、加藤に「日本的なるものへの呪詛」を抱かせ、それは子供の頃より親しんだ『万葉集』に対してさえも例外ではなかった。このために「西洋かぶれ」というイメージは、加藤に長くつきまとうことになったのだ。

第3章 加藤にとっての西欧

1. 「雑種」と「接ぎ木」

「西洋かぶれ」とみなされた加藤だが、「日本文化の雑種性」では西洋だけでも日本だけでもない、混淆されたものとしての「雑種」を主張する。「雑種」が挑発的な言葉であることは先述した。しかしなぜ加藤は「接ぎ木」と

という言葉をしりぞけたのだろうか。「日本文化の雑種性」において加藤は「雑種」は「接ぎ木」と異なることを明確にしている。第1章で触れた56年『三田文学』の座談会においても、「雑種」とは「根から種がかけ合せてであると、切り取るのが不可能」と表現され、「日本文化の雑種性」においても以下のように強調する。

戦後の民主化の過程から生じた精神上の変化には、その後もとへひきもどそうとする力が加わったにも拘らず、容易にもとへもどらぬものがある。もとへもどらぬものは日本人の人間としての自覚であって、枝葉の接木としての西洋文化の輸入というようなことではない。²⁷⁾

加藤が「雑種」と「接ぎ木」を注意深く使い分けたのは、日本文化における西洋文化の輸入が「接ぎ木」である、との認識を持つ人々がすでにいたからであり、その主張に賛同しなかったからではないだろうか。以下に挙げるのは加藤が「日本文化の雑種性」を発表するより以前の亀井勝一郎の文章である。

明治以後の日本は、民族として一大變貌期に入つてゐるといふ事實だ。異質の文化にいきなり接触して、それを獨自なかたちで消化し、云はゞ接木に成功して新しい果實を得るまでには、どんな民族でも三四百年はかゝる。開國以來まだ百年にみたない日本で、このやうな混亂はあたりまへだ。接木を可能ならしめるための犠牲だといふことである。落着く土地もない漂ふ人のかなしさを味はなければならない。²⁸⁾

亀井の論は、西洋文化は日本文化への「接ぎ木」であるとする。また、「接ぎ木」の上に果實を収穫しようと考えている点で、種子を輸入しなければならないと説いた森鷗外「洋学の盛衰を論ず」や、根茎から分かち難く結びつ

いているとする加藤の「日本文化の雑種性」とは異なる。しかし、亀井のような認識はさほど珍しいものではなかったのであろう。というのも、加藤も敗戦から間もない1947年に発表した「アメリカ・方法叙説」では、加藤がヨーロッパの種と接木について触れた箇所があるからだ。

我々は、後をではなく、前を向かなければならぬ。後を向けば、我々の過去は惨めなものだ。歐羅巴の種を己の土に育てた亜米利加に反して、祖國日本は、新しい枝の接木の他には、何も考へなかつた。一八五四年と一九四五年とを隔てる一世紀の間に、変化はあつても、日本の意識に本質的な成長はない。浦賀沖の黒船にも無抵抗であつたが、東京上のB29にも無抵抗であつた。自ら生き得ない思想を知ることは、無意味であり、合理的思惟を貫き得ない人間は石胎である。²⁹⁾

ここでは55年に「日本文化の雑種性」を発表した際の、希望を見出そうという姿勢はまだ見えない。また根からの混淆としての雑種でなく、接木と表現し日本について悲観的な論調で書かれている点で、大きく異なる。

加藤はここでアメリカをヨーロッパの種を己の土に育てたと評し、日本を対比して「接ぎ木」と表現している。アメリカのヨーロッパ文化受容と「接ぎ木」という言葉から喚起させられるのは、加藤が晩年の講演会でもその内容に触れた³⁰⁾ ヴァレリー「アメリカ論——ヨーロッパ精神の投射」である。

わたくしが言うのは、「大洋」を渡り、大部分は処女地である土地に根を下したのは、生れ故郷から遠くはなれた空の下で生きる能力を持った事物であったということです。〔……〕

第一に、アメリカ大陸は種々の民族と滅亡した生活の痕跡を持っていました。ヨーロッパ的要素の浸透と接触の結果として将来大きな反作用が現われることも不可能ではありません。たとえばわれわれの美的観念

がメキシコの土着芸術の強烈な性格と接合された結果、非常にすぐれた配合が生じたとしてもわたくしは意外とは思いません。芸術の発達において接木〔la greffe〕はもっとも稔りの多い方法なのです。すべての古典芸術は、打割って言えば、接木の産物なのです。

第二の思想、これはまったく違った方面のものです。たとえヨーロッパがその文化の滅亡または衰退に立会わねばならず、われわれの都会、博物館、記念碑、大学などが、科学的に組織された戦争の猛威のなかで破壊されねばならないとしても、たとえ思想家や芸術家の生活が残忍な政治的または経済的環境のもとに不可能、または恐ろしく残酷なものになったにしろ、次のような考えのなかには或る種の慰藉と希望とが含まれています。すなわちそれはわれわれの作品、われわれの事業の記憶、われわれの最大の偉人たちの名は、跡形もなく消滅はするまい、そして新世界のそこここに生れる精神の内部で不幸なヨーロッパ人達の絶妙な創造物が第二の生を営むであろうということです。³¹⁾

日本が西洋文化の輸入に活発であった頃、ヴァレリーは「精神の危機」において、すでに西欧の没落とアジアの隆盛を論じている。爛熟し黄昏を迎えた西欧文明の中に生きるヴァレリーは、ヨーロッパが滅びても、ヨーロッパの精神は新しい土地でまた生きて行くことができるだろう、という点に希望を見出す。「日本文化の雑種性」が論ずるのは、ヴァレリーの希望と合わせ鏡の希望でもあったのではないだろうか。加藤は「日本文化の雑種性」を予感させる1954年の論考「西洋見物の途中で考えた日本文学」において以下のように述べる。

もし新しい文化がおこるとすれば、多分ヨーロッパ以外のところにしか考えられない。そしてそういう考えが世界中の常識になりつつあるときに、アジアの一国がヨーロッパの“今の”文化、つまりやがてほろび

ようとしている文化を手本とし、それに近づくことをもって唯一の理想としたとすれば、それは奇妙な話である。³²⁾

また、加藤が留学前年 1950 年に発表した「鷗外と洋学」も「日本文化の雑種性」に至る道筋として不可欠であろう。加藤は鷗外「洋学の盛衰を論ず」における我が国の西洋学の輸入に触れ、「わたくしが鷗外に借りていえば、すでになされた洋学の輸入は、洋学の果実の輸入であって、種子の輸入ではない」という。

渡辺一夫教授は、フランスの文化と日本の文化とを比較しながら、われわれの文化の根底の堅固ならざる点に注意し、竹内好氏は、それが単に先進国と後進国とのちがいがというような生易しいものではなく、中国における洋学が、ヨーロッパ文明の種子の輸入であるのに反し、日本における洋学が、果実の輸入をいつまでくり返していたところでどうにもなるまいということを論じた。³³⁾

加藤がなぜ日本文化を接木でなく雑種と表現するに至ったのか。フランスへの留学は加藤にどのような影響を与えただろうか。加藤が留学中の 1952 年 10 月に刊行された『戦後のフランス』（未来社）を例にとってみると、「日本からみたフランスとフランスからみた日本」では、1947 年の「アメリカ・方法叙説」との変化が表れている。

私がパリにいた半年以上の間に、新聞が大きくあつかつた日本の記事は、五月一日事件だけであつた。ル・モンドは、その日の最大の記事として扱つた。左翼も、右翼も、それぞれ相當の紙面をさき、寫眞を出した。そういうことが一度だけあつた。その他の日に日本はフランスの政治家からも、文學者からも、労働者からも、——いや、フランスにかぎ

らず多分世界からも忘れられていたのである。

だから、われわれは、今さらいうまでもないことだが、自分のことは自分でしなければならない。日本のことを心配しているのは日本人だけである。そして、古いヨーロッパとの関係についていえば、何もかも向うにあるものはありがたいという感傷的な考えをすてると同時に、今やヨーロッパには学ぶべきものは何ものものないなどという空想をすてることが必要だ。

われわれは、むしろこれからヨーロッパとの接觸を深めるべきだと私は思う。なぜなら、今や、浅いところには学ぶべき何ものものこつていないし、それにも拘らず、いまだに、日本は世界の文化に参画していないからである。仕事はむずかしくなつた。實現することが不可能にちかいほどむずかしくなつたようである。³⁴⁾

「自分のことは自分でしなければならない。日本のことを心配しているのは日本人だけである」という態度は、「日本文化の雑種性」の冒頭により明確な立場として書かれる。「日本文化の雑種性」は「日本人は日本人の立場にたたなければならぬという原則、つまり日本の西洋化を目標にして仕事をしても日本の問題は決して片づくまいという私の考えの原則」³⁵⁾として「日本文化の雑種性」のなかに持続している。

「日本からみたフランスとフランスからみた日本」と同じく『戦後のフランス』に収録された木下順二宛の私信にも、同様の態度が見られる。

ヨーロッパから日本をみることは、社會的觀點から意味があるばかりではなく、文化的觀點からも大いに意味があるでしょう。そんなことをいつている時ではないが？とも思わないではないが、われわれはわれわれの畠を耕すことをやめるわけにはゆきません。³⁶⁾

木下宛の私信において、加藤はヴォルテール「カンディードまたは最善説」から結びの言葉である「我々の庭を耕さなければならない」Il faut cultiver notre jardin. をひいて自らの仕事の方向を見据えている。いうまでもなくフランス語の耕す *cultiver* という動詞は、名詞の *culture* と地続きである。先述の中村真一郎が木下の仕事を評価したように、加藤も木下の仕事に深い共感を持っていたからこの言葉を引いたのであろう。日本文化をどのように耕すか、これはこの時代の知識人の最も重要な関心事の一つだった。

興味深いのは、この『戦後のフランス』の頃に加藤は悲観的であったが、帰国直後に発表した「日本文化の雑種性」前夜に発表された二つの記事には「希望」という言葉が見られることだ。52年秋から54年春にかけて、加藤はどのような道筋をたどったのだろうか。

2. 「希望」を見出すまで

渡仏中の加藤の思索をたどる手がかりは少ないが、私事に関しては人生を変える出来事があった。のちに二番目の妻となるヒルダ・シュタインメッツとの出会いである。ヒルダは加藤と出会う以前から、宮城県に住む「菊池とも」という女性と文通をしており、加藤周一文庫に収蔵された菊池ともからの書簡に「S. Kato」の名が現れるのが52年9月である³⁷⁾。英語で交わされる書簡には、菊池ともがヒルダに書き送った日本の話題は、身近な風俗（例えば桃の節句や端午の節句）から華道、仏教、日本の寺社仏閣や教育制度にまで至る。菊池ともからの最も古い書簡の日付が1951年3月30日であるから、ヒルダが加藤に出会う以前から、日本や日本文化に関心を抱いていたことがうかがえる。

パリで「日本は〔…〕多分世界からも忘れられていた」と考えていた加藤が、日本のことを多少なりとも知るオーストリア人のヒルダと出会ったとき、何を思ったのかは知るすべがないが、加藤がヒルダに惹かれて52年の冬に四カ国占領のただ中のウィーンを訪れたことは事実である。このころの

日記や詩、訪問記は「〔詩作ノート〕」として「立命館大学図書館／加藤周一文庫デジタルアーカイブ」³⁸⁾に公開している。このノートに書かれた「Zwei Wochen in Österreich〔オーストリアでの二週間〕」と題されたメモ書きをみると、加藤はウィーンを Stadt der Greisin、「老人の都市」と呼び、heißt Stadt der Vergangenheit、「過去という名の都市」とも表現する。「老人の都市」とはカフェや映画館に若者の姿が見えないということと、おそらく、ローマの駐屯地に起源をもつ、パリとはまた異なる古都の印象を表したのだろう。加藤はこの古い都市の印象と人々の肉声をノートに書き留めている。

留学中の加藤の足跡の詳しい調査は今後取り組まなければならない課題であるが、それをひとまずおくとしても、ヒルダとの出会いによって加藤がロンドンへも足を伸ばした事実は、加藤が「日本文化の雑種性」において、「純粋種」として英仏を例にあげるために必要な経験であっただろう。

1954年1月、加藤は『文学』22巻1号（岩波書店）に、「ある感想——西洋見物の途中で考えた日本文学のこと」（のちに「西洋見物の途中で考えた日本文学」と改題、『雑種文化——日本の小さな希望』（大日本雄弁会講談社、1956）に収録）を発表する。この論考は、先に触れたように木下順二宛私信において「われわれはわれわれの畠を耕すことをやめるわけにはゆきません」といった言葉を思い起こさせ、かつ「日本文化の雑種性」に直接接続する論考である。

日本の外へ出て、日本の文学のことを考えると、今の日本文学が、古い伝統からはなれて西洋を手本にしていることが、大へん奇妙にみえる。そんなことをしている国は世界中のどこにもない。日本よりおくれて（また日本とはちがった方向で）国の近代化をはじめたアジアの大国は、中国にしてもインドにしても、西洋の技術を輸入しながら文学や芸術や思想の領域では自分の国の過去にあたらしい文化の背景をもとめようとしている。

日本の文化はもちろん中国やインドの文化ほど古くもなかったし、大がかりなものでもなかった。しかし外からみるとかなりはっきりした特徴をもって独立した一つの世界をつくっている。少くとも造形美術と文学とにおいてはそうだ。それをみずからすすんで放棄し、西洋を手本にして何かをつくろうとするほど妙なことはない。われわれの伝統のなかには、もしそのなかに入ればまだそこから引きだせるもの、そこから出発して発展させることのできるものが沢山ありそうである。少くとも私はそう思うし、今までそれを充分にしてこなかったのは怠惰であったという印象をうちけすことができない。³⁹⁾

また、同年5月には『文学』22巻5号に「続ある感想——高みの見物について」(のちに「高みの見物について」と改題)を発表し、傍観者であること、よそ者であるからこそ得られる客観的視点の意義を説いた。この立場は「私は朝鮮半島における戦争の一方の側の世界にとにかく住んでいた。それが初めてフランスへ行った。フランスはどちらでもない第三地域です。朝鮮戦争というものを第三者の立場から見ることができたというのは、たいへんありがたかった点でした」⁴⁰⁾という晩年の加藤の言葉が示すような第三者の視点、客観的に見る視点を挑発的に言い表したものである。「日本文化の雑種性」においても、加藤はできる限り客観的な立場を保とうとする。その姿勢は「雑種」という言葉によい意味も悪い意味も与えなかった「日本文化の雑種性」の基本的態度に通ずる。

もつといえば、「高みの見物」はヨーロッパにおける異邦人である加藤自身を救ったのではないだろうか。「高みの見物」の立場をとれば、加藤はよそ者であり続けることに意義があり、客観的にヨーロッパを観察することができる。これはヨーロッパ人には不可能であり、加藤はヨーロッパに暮らす中で独自の立場を確立しようとしていた。

このようにして、加藤は帰国する以前から、「日本文化の雑種性」に向け

ですでにその歩を進めていたのだ。

第4章 「日本文化の雑種性」前夜——ふたつの新聞記事

1、ふたつの新聞記事

鷺巣力が作成した年表⁴¹⁾によると、加藤がフランス留学から帰国したのは1955年3月だった。帰国して間もなく、加藤は精力的な執筆活動を再開する。帰国途中の見聞を「船旅の記」⁴²⁾として西日本新聞に寄稿(4月5、6、8、9、12日)するなど、「西洋見物記」の延長にあたる原稿を書く一方で、「雑種文化」に直結する記事が二本、新聞に掲載される。4月4日付の『日本読書新聞』に掲載された竹内好との対談「ヨーロッパのこと日本のこと」⁴³⁾、そして4月11日付『愛媛新聞』に寄稿した「日本文化の根——雑種文化の問題」⁴⁴⁾である。

「ヨーロッパのこと日本のこと」の小見出しには「雑種文化の可能性——人の畠はきれいに見える」と書かれており、加藤が帰国後すぐに「雑種文化」のテーマにとりかかったことがうかがえる。「人の畠はきれいに見えますからね」という加藤の言葉は、先述した木下宛の私信に書かれた「われわれはわれわれの畠を耕すことをやめるわけにはゆきません」を思わせる。

竹内との対談が掲載された一週間後、11日の『愛媛新聞』に「日本文化の根——雑種文化の問題」を寄稿するが、これは『思想』6月号の「日本文化の雑種性」の雛形といえる内容である。というのも、竹内との対談で提出された内容がより整理され、ここではじめて、日本文化の「根が雑種」であり、枝葉の問題ではないのだという主要な問題提起が、明確に提出されている。加藤周一文庫所蔵の1955年の手帳には帰国後の執筆予定が書き込まれ、そこに「共同：日本文化の根(雑種)」というメモが見られる。「日本文化の雑種性」に先立つこの対談と寄稿の内容をそれぞれ確認してみよう。

2、竹内好との対談「ヨーロッパのこと日本のこと」

帰国した加藤が雑種文化のアイディアを話すことになる相手が竹内好であったのは、おそらく偶然ではないだろう。かつて加藤を最大の好敵手として評価しつつ批判し「私は、加藤とおなじ目標に向って、加藤と反対の方に歩く」⁴⁵⁾と書いた通り、加藤が滞欧した3年余りのあいだ国民主義文学に向き合った竹内と、留学した地で西洋文化に深い部分で接触し対峙し続けた加藤が、同じ目標に向かって正反対の道を歩んだ先での再会だったのかもしれない。

「ヨーロッパのこと日本のこと」はまず竹内が口火を切り、加藤に質問する。竹内によれば、知識人の海外旅行者がふえ、福田恆存が帰ってくると今度は日本文化反省の方へ仕事を向けて来た、大岡昇平もやはりそうらしいが、加藤はどうかという。これに対して加藤は次のように答えている。

いろいろな感じがあるんですけどね。とにかく今の日本には生活の上でも、文化の上でもヨーロッパの影響が相当ひろくあるわけでしょう。そこでヨーロッパに行く前には、日本にあるヨーロッパ的な要素に目が移るということになりがちだった。向うへ行ってみると、日本にあるヨーロッパと本物のヨーロッパとは相当かけはなれたものです。ヨーロッパにあるヨーロッパのものと同じ程度の本物を日本に探そうとすると、やはり日本的なものになる。そういう反応が日本へかえってきただれにでも一応起ると思うんですよ。⁴⁶⁾

「日本にあるヨーロッパと本物のヨーロッパとは相当かけはなれたもの」、
「ヨーロッパのものと同じ程度の本物」は「やはり日本的なものになる」という加藤のこの返答は「日本文化の雑種性」では、建築や絵画を例にとって、より具体的に描写される。

ヨーロッパにあるヨーロッパのものとは、伝統に結びつき風土と歴史に根

ざしているものである。日本にそれと同程度の「本物」を求めるとき、加藤もまた京都の古い軒並、北斎、光琳を想起したという。「日本文化の雑種性」ではこのように表現される。

私は身のまわりに西洋の街を眺めていた。それは東京の西洋式の街とは似ても似つかぬものである。日本でそれに似たものを想出すとすれば、そこにだけはながい歴史を負った文化が形となってあらわれている京都の古い軒並を想出すほかはない。街とはかぎらぬ、セザンヌのまねと本物のセザンヌとを比較することは、誰にもばかばかしくてできない相談だろう。西洋見物の途中で日本の絵のことを想出すとすれば、北斎にさかのぼり、光琳にさかのぼるほかはない。日本の風土と古い歴史とに根ざしたものの考え方や感受性、また風俗習慣芸術の全体に対し自覚的にそれをとりあげようとする心の動きがおのずからおこる。もしそういう動きを国民主義というとするれば、私は西洋見物の途中で日本人の立場を考えたときに、その内容は、国民主義的であった。そしてそういう私の考えは、英仏両国に暮している間、英仏両国民の自国の文化に対する極端に国民主義的な態度によって、大いに刺戟されたのである。⁴⁷⁾

このように加藤は、「日本文化の雑種性」では、留学中の自身の考えの内容を国民主義的であったと言う。だが先述した留学中の「日本から見たフランスとフランスから見た日本」、また木下順二宛の私信に書かれた、世界の日本に対する無関心を感じ、危機感を募らせた加藤の言葉を思い返すと、留学中に加藤が感じた「国民主義的」な考えとは、日本国内における国民主義の隆盛とはまた別の、世界のなかに日本をどのように位置づけるかを考えたものであったはずだ。

竹内との対談に目を戻すと、加藤は日本文化と西洋文化との「まじり合い」に言及する。

そして今の私の考えでは、まあこういうふうには思っているんです。日本には日本のものが残っている、それから西洋の影響があつて、万事がまじり合つてできていますね。ところがフランスや英国の場合には、極端に自分の国の文化だけでやっている。そして表面的には異質の文化に対して解放的なんです。しかしそれは、それがなければ生きていけないという形で受け入れるんじゃないですね。生きて行く原理は、むしろ純粋に自分の国のものなんでしょう。日本の場合には異質の文化が相当深いところに入っている。それをみんな抜きとると、とたんに生活が成立たないというふうには文化を養つて行くのに大事なところに入っていると思う。そこで日本側から起つてくる反応は、ヨーロッパと同じように日本の文化を純粋なものにしたいという気持。その一つは国粹主義で、ヨーロッパの影響をなるべく排除して日本的なものに帰ろうという、さっきお話したヨーロッパから日本へかえてきた人の印象の型です。もう一つの型は日本的なものを清算してなるべくヨーロッパに日本を近づけようという考え方。私はそのどちらも実現不可能だと思う。不可能なことをやつて今まで来たから、近代主義的な、ヨーロッパ主義的な風潮の起る時と、国粹主義的な反動のくる時が、交互にきた。尊王攘夷のあとに文明開化となり、国粹主義のあとに民主主義となるようにね。これからの問題は、そういう日本文化の純粋化運動が日本の方に持つて行つても、西洋の方に持つて行つてもだめだということをもとめ、まじつたものをまじつたものとしてうけとることだろうと思う。フランスや英国の文化は純粋、日本は雑種だといえはいるけれども、むしろ性質は違いますけれども、それは、向うが上等でこっちが悪いとか、こっちに希望が少くて向うに希望が多いということにはならない。ですから自分の立場をはっきり知つた上で、その上に立つてやつて行けば、随分希望があるんじゃないかという感じがするんですね。⁴⁸⁾

このように、竹内との対談の段階では日本と西洋の関係は「日本の場合には異質の文化が相当深いところに入っている。それをみんな抜きとると、とたんに生活が成立たないというふうに文化を養って行くのに大事なところに入っていると思う」という言い回しで表現された。この主張は晩年、『二〇世紀の自画像』において語った言葉とほとんど変わらない。⁴⁹⁾「日本文化は根から雑種である」という「雑種文化」論の主題が明確にあらわれるのは、この一週間後『愛媛新聞』に掲載された「日本文化の根——雑種文化の問題」を待たなければならない。しかし、日本文化を「純粋化」させようという試みは、その方向が西洋文化を排除した日本文化であれ、日本文化を排除した西洋文化であれ、どちらにしても不可能であるという主張は、竹内の対談においてすでに述べられていることがわかる。

また、英仏の文化を純粋、日本を雑種だと「いえばいえるけれども」と、英仏＝「純粋種」、日本＝「雑種」の図式に言及している。それに続く部分、「自分の立場をはっきり知った上で、その上に立ってやって行けば、随分希望があるんじゃないかという感じがするんですね」には、「雑種」という「自分の立場」を認めた先にこそ希望があるという、「日本文化の雑種性」の結論の輪郭が見える。

このように、竹内との対談ですでに、1) 日本文化を純粋化させようという試みはその方向が日本種であれ西洋種であれ不可能である、2) 日本の場合は異質な文化が相当深いところに入っているので、抜き取ると生活が成り立たない、3) 「雑種」であるとの立場に希望はある、という点に触れられており「日本文化の雑種性」の骨組みが出来上がりつつあることがわかる。

孫歌はこの対談を取り上げて「私が特に注目したいのは最初の部分で、竹内は加藤の仕事がどういう点でユニークなのかということを非常に努力して明らかにした」⁵⁰⁾と述べるが、竹内による「二つのポール」の喩えは、加藤が「雑種」の構想を語るために非常に適切だった。竹内は加藤が渡仏以前から「二つのポール」を考えていたのではないかと水を向ける。

西欧化の方向に行くというやつと、西欧的なものを一切排除して国粋主義に戻るといふ方向ね。加藤さんはまだ向うにいらっしやられないうちからそういう二つのポールを立てて考えていられたように思うんですがね。つまり全部西欧化することが結局全部国粋主義になることと究極では一致するといふお考えじゃなかったんですか、あの頃のお考えは。つまり日本が完全に近代化した場合に、それは日本の古来の伝統に根ざしたものであって、同時にそれがヨーロッパ的なものになるという形を想定していられたんじゃないか。⁵¹⁾

このように竹内は「二つのポール」の枠組を示しながら、加藤自身の「二つのポール」に触れる。戦後、戦争のプロパガンダに利用された文学に対して、樋口陽一の言うところによる「日本的なるものへの呪詛」を抱えつつ、一方で実朝論を発表した加藤の態度は樋口の論考に見た通りである。「西洋かぶれ」で近代主義者と見なされていた加藤であったが、しかし、この対談で竹内は「非常に一方で西欧を謳歌し、同時に「新古今」なんかを一方で持上げていたでしょう」と的確に加藤の戦後の歩みを捉え、加藤のうちにすでにあった「雑種性」を指摘しているのだ。

竹内の質問に対して、加藤は次のように応ずる。

はじめは、そういうふうな二つの極があって、両方押し進めて行けば一致することを予定した。理くつはそうなるけれど、実際にはそういうふうなものじゃない。そうじゃなくてまじったものですね。昔「新古今」にあったようなものとも違うし、今のフランス人がやっているものとも違ってつまり両方の要素が初めから入ったものですね。そういう意味で雑種と言ったんですけれども、雑種が雑種にしかないようなおもしろさ、良さ、強さを持って来ることは可能だろうと思う。⁵²⁾

竹内は渡仏を経て加藤の考えが変化したことに対し「その変わってくる経過に何か作用したのがありますか」と尋ねるが、加藤の答えは「出かける前から、実はそういうふうに変りつつあったわけですね」と、「雑種」の発想には渡仏以前からの連続性があることを明かす。

出かける前から、実はそういうふうに変りつつあったわけですね。戦争後に私がフランスのことを書いた時のような考えに基かないで、フランスに出発したわけですよ。前に感じていたことがでたらめではないかという考えで出発した。果してでたらめであるけれども。⁵³⁾

加藤によれば、彼の変化は渡仏の以前にもあった。加藤は渡仏経験のみによって、一足飛びに「日本文化の雑種性」を構想したという訳ではないようだ。加藤が敗戦後の自らの考えのどの部分を「でたらめ」と考えたのかについて、詳しい検討が今後必要であろう。

このように、竹内という同じ目的に向かって正反対に歩む好敵手との対談によって、日本文化に西洋と東洋という「二つのポール」があるのではなく、その二つがまじって、いわば一つのポールになっているという、「雑種」の基本的な構想が提示されたのである。

2. 「日本文化の根——雑種文化の問題」

竹内との対談から問をおかず、加藤は『愛媛新聞』に「日本文化の根——雑種文化の問題」と題した文章を寄稿する。この文章は「日本文化の雑種性」と同じように船上からみた景色から始まり、「枝葉」「根」という言葉を用いて日本文化の根が雑種であると説く。

西洋から日本へ船でかえるとき道中アフリカやアジアの港へよつて、さて日本の港へ入ると西洋以外のところで西洋文化がこれほど強く根

をはっているところはほかにはないという印象をうける。しかし同時に西洋とは全くちがう風俗習慣、風土のいわゆる日本的な世界がこれから始まるという印象もうける。いいとかわるいとかいうことでなく、事実の問題として西洋の文化の影響が日本の枝葉でなく根を養っているという感じがするのだ〔。〕別のことばでいえば、日本文化の根は雑種ということになる。ところが英仏の文化の根は純粋種である。そういう国では枝葉にあらゆる外国の文化の影響がみられるが、異質な文化の影響がそれぞれ英国なり仏国なりの文化の根におよんでいるという感じはしない。根は純粋に自国の養分だけでまかなっている。そしてそれがそうであることから来る独得のつよさ、確かさが英仏の文化にみられることは今さらいいうまでもない。⁵⁴⁾

この寄稿に初めて「枝葉」「根」という「日本文化の雑種性」の鍵となる言葉が現れ、帰国直後の4月の時点で加藤が「日本文化の雑種性」の構想をほとんど完成させていたことがうかがえる。

つづいて加藤は日本文化を論ずる型について、「二つの反応がある」として紹介する。

一つは西欧派の日本を近代化する、具体的には英仏にできるだけちかづけようという議論、もう一つは国粋派の西洋の影響を除き、日本をできるだけ日本化しようという議論である。どつちにしても、日本の文化を雑種から純粋種にしてゆこうという建前にたち、そういう建前にたつ以上一般に文化は純粋であればあるほど上等で、雑種であればあるほど下等だろうという考えを前提としている。二つの反応がわかれるのは、根が雑種の今の日本の文化を、純粋西洋種にするか、純粋日本種(または日本・中国種)にするかということにすぎない。ところが実際にはどつちの方向にも雑種を純化するということはできない。話が枝葉

にかかっているうちはどういう整理でも心がけ次第で可能だろうが根が問題になるときは決心次第でどうにでもなる。まして流行次第でどうにでもなるというわけにはゆかない。あるときには尊皇じょういがはやり、あるときには文明開化がはやる。あるときには国粹主義がはやり、あるときには民主主義がはやる。逆もどしがおこるとやがて逆もどしの逆もどしがおこるだろう。なぜか、日本文化の純粋化運動は枝葉に及ぶが根には及ばないからである。根は常に二つの相反する方向への純化運動を必然的にするような二つの要素からなっている。根は雑種である。⁵⁵⁾

注意したいのは、竹内との対談でも、「日本文化の根——雑種文化の問題」でも、加藤が希望という言葉を用いて、渡仏した直後の絶望感を感じさせないことだ。

では雑種である日本文化は、英仏の絶粋種にかなわないだろうか——という質問は、文化問題をオリンピック競技と同じように考えるところからおこる質問である。文化問題はどつちが上等か、どつちが勝つか、という風には扱えない、二つの文化を比較するときにはその性質がどちがうかということだけが問題だろう。純粋種の文化と雑種の文化とはむろん性質がちがう。性質はちがうが、それがただちに上等下等ということではなく、まして雑種はつまらぬということではない。かえつておもしろくなり得る条件がたくさんあるかもしれない。

私は英仏の文化（今の文化）が純粋種だといったが、西洋の文化がそうだとはいわなかつた。同じ西洋のなかでも、英仏よりはドイツに、ドイツよりはスペインに雑種にちかいものがある。そしてそれは雑種だからおもしろいという面をもっている。日本の文化の根は雑種であり、それを純化することはできない相談だと私は考える。だから私は日本人として絶望しているわけではなく希望にあふれているのである。⁵⁶⁾

滞欧中の加藤の書簡やノートの変遷を思い出しても、この「希望」は決して燦然と輝くものでないだろうということが推測される。「絶望しているわけではなく希望にあふれているのである」とわざわざ断ることに「日本は世界の文化に参画していないからである。仕事はむずかしくなつた。実現することが不可能にちかいほどむずかしくなつたようである」⁵⁷⁾というヨーロッパでの加藤の言葉の苦悩が思い出される。単行本『雑種文化論——日本の小さな希望——』の「小さな」という言葉は、一面で加藤の偽らざる予想であったのだろう。しかし小さくとも、希望は絶望よりもはるかにましである。

3. 渡仏を挟む加藤の連続性

「日本文化の雑種性」が生まれる直接の契機が渡仏経験にあったことは明らかであろう。しかしこの論考の着想の背景は渡仏経験のみにあるのだろうか。

加藤が渡仏する年の1951年2月『展望』に寄稿した「日本の町」は、都会になろうとする田舎を描く。鷲巢力によれば、加藤は敗戦後、一時期浦和に住んでいたという。

何かを手本にして自らの「体格」やそれを育んだ土壌をないがしろにする、という点において日本の近代化と田舎の都市化は似ている。加藤は自らを否定して手本と一体化しようとする態度を美しくない、と書く。さらに加藤の筆は、日本国憲法にまで及ぶ。

わたくしは、浦和を考へるときに、舊家を「近代的」教養のためにとびだした、しかし、それもまた親のつくつたもう一つの家のかなへ向つてとびだした一人の美しい女性を思ひうかべないわけにはゆかない。
〔……〕

わたくしは、なんども彼女が美しいといつた。今度は、もう少しはつきりと云ひたい、彼女は、土から生えたやうな、肩や腰のしつかりした、

その「田舎」的體格において、美しかつた。しかし、その體格と、體格を生んだものを信じないで、それから遠ざからうとするあらゆる努力、都會的な教養らしいものや、こしらへものゝ聲や表情や、また金をかけて派手にしたてはしたが色の配合のいかにも悪い服装において、全く美しくはなかつた。

日本の町は、日本の町の美しさをつくれればよい。わたくしは、京濱東北線で、浦和・赤羽間を毎日往復しながら、いつもさう考へた。中小企業の町川口の榮枯盛衰は激しく、勤人の町浦和は常に貧しくひつそりとして、蕨のN車輦工場だけが、確實に繁榮してゐるやうにみえる。しかし、その大きな工場が畠のまんなかに立つてゐるやうに、川口の小企業を支へるものも徒弟制度であり、浦和の「インテリゲンチャ」の精神の底にあるものも、家族的・地主的な意識であつた。三つの町、浦和、蕨、川口は、それぞれのし方で、大きな「田舎」の上に建つてゐる。子供のわたくしが夢みた牧歌的な田舎ではなく、貧しさと家族的社會の構造とが固く組みあはされた、現實の田舎の上に。そして、それらの日本の町の上には、赤羽の電車のプラットフォームからもよくみえるやうに、高く、巨大な塀をめぐらした兵榮がある。嘗てはそこに日本帝國主義の軍隊が、一切を支配してゐた。今では、その軍隊がなくなつたといふことを、日本國憲法が保證してはゐるが。⁵⁸⁾

加藤は上記の文章に続けて「憲法は保證してゐるが、憲法を保證するのは社會だ」と述べる。また、この文章にはマルクス主義をくぐり抜けた加藤の視点が明らかである。

「加藤周一文庫デジタルアーカイブ」に公開されるノート「JOURNAL INTIME 1950 1951」の「FEVRIER le 6 lundi」⁵⁹⁾にはこの下書きがある。このノートによれば、加藤はパスカル「田舎の友への手紙」を念頭にこの文章を執筆したようだ。またこのころの加藤は、毎日新聞記者で經濟を専門とし、

旧制第一中学校時代の級友でもあった山本進との交流があり影響を受けていたことが推測される。この文章は加藤が敗戦後の数年間、日本社会の再建の方向を加藤なりに模索していたことの証である。それと同時に「日本の町は、日本の町の美しさをつくれればよい」という言葉は、渡仏を挟んで加藤が日本へ戻ってきた際に見出した「日本文化の雑種性」の希望と酷似している。渡仏は加藤にとって重要な転換点であり、大きな変化をもたらしたことは疑いがない。しかし一方で、渡仏経験だけが、加藤に「日本文化の雑種性」を書かせる土壌であったとは言い切れないのではないだろうか。

おわりに

敗戦後の加藤がマチネ・ポエティックとして中村真一郎、福永武彦との共著『1946・文学的考察』（真善美社、1947）を刊行し、旺盛な文筆活動を行なったことは周知の事実である。加藤が「日本文化の雑種生」を書くために渡仏経験が重要な転機であったことは、本稿で確認した。しかし、加藤が日本文化とどのように対決したか、ということは敗戦以降のマチネ・ポエティックの活動に遡る必要があるだろう。

樋口は加藤周一の人と業績を以下のように表現する。

「洋学紳士」ならぬ加藤周一は、幼児・少年期の家庭を通じた「西洋」との接触に始まり、自分自身の濃密な心身にわたる西洋経験を経る。加えてのちにアジアを含め、日本という対象に迫る外からの視点を耕し続けながら、「日本人」論ならぬ日本文化論の、公刊・未公刊を合わせ膨大な蓄積を残して去った。⁶⁰⁾

幼児・少年期の家庭を通じた「西洋」との接触は『羊の歌』に描かれ、鷺巣力が『加藤周一はいかにして加藤周一となったか』に説いたように、留学

経験を持つ母方の祖父の影響が大きい。

また、加藤自身が戦時中のマチネ・ポエティクの詩作活動にみられるように、フランス象徴派の詩の技法（例えば脚韻）を取り入れつつ、12音で音を揃えるアレクサンドランを利用し、アレクサンドランでありながら五七調という詩を創作したことも文学における加藤の特徴と言えるのではないだろうか。⁶¹⁾

樋口が敗戦直後の加藤について「一九四五年をはさむ時期に書かれた日本的なるものへの呪詛は、『万葉集』や『源氏物語』を「世界一流の文芸作品」とする国文学者の「迷信」を切って捨てて見せるほどのものだった（『1946・文学的考察』）」と指摘したことはすでに述べた。友人を殺した「いくさ」への激しい怒りが「日本的なるものへの呪詛」へ加藤を駆り立てた時期は確かにあった。しかしその一方で実朝や定家を論じた敗戦後の加藤は、「日本的なるもの」とどのように向き合ったのか。

戦争を生きのびた加藤が「日本的なるものへの呪詛」だけにとどまらなかった足跡は、「日本文化の雑種性」へとつながる道であったであろう。例えば加藤が渡仏前に刊行した『美しい日本』（角川書店、1951）は、敗戦後の加藤の数年間の執筆の集大成であると言える。『1946・文学的考察』や『美しい日本』に現れる加藤の日本観を再確認し、渡仏を挟む加藤の執筆活動の連続性の検討を今後の課題としたい。

以上

注

- 1) 加藤周一「雑種の日本文化の希望」『加藤周一著作集第7巻』、平凡社、1979、46頁
- 2) 加藤周一「日本文化の雑種性」『加藤周一自選集第2巻』、岩波書店、2009、19 - 20頁
- 3) 『知性』第3巻14号、河出書房、1956、222-223頁
- 4) 例えば日高六郎編『現代思想体系 34 近代主義』（筑摩書房、1964）の日高による解説

のうち 32 から 33 頁を参照。

- 5) 『加藤周一自選集第 2 巻』岩波書店、2009、24 頁
- 6) 三浦信孝・鷲巣力編『加藤周一を 21 世紀に引き継ぐために』水声社、2020、31 頁
- 7) 松沢弘陽「天賦人権論争覚え書」『福澤論吉の思想的格闘』岩波書店、2020、217 頁
- 8) 加藤周一『私にとっての 20 世紀』岩波書店、2000、116-117 頁も参照のこと。
- 9) 2019 年 9 月 21 日の日仏会館における加藤周一生誕百年記念シンポジウムにおいても、質疑応答の時間に「あらゆる文化は雑種だ」という意見がセッション 3 の登壇者から発せられ、セッション 1 の登壇者が、それはセッション 1 ですすでに議論されたことだ、と客席から応じたことは象徴的だった。
- 10) 前掲『加藤周一自選集第 2 巻』24 頁
- 11) 『三田文学』三田文学会、1956、8 頁
- 12) 菅野昭正「思いだすままに」、『知の巨匠 加藤周一』、岩波書店、2011、8 頁
- 13) 加藤周一『20 世紀の自画像』、筑摩書房、2005、43 頁
- 14) 丸山眞男「日本におけるナショナリズム」『丸山眞男集第 5 巻』、岩波書店、1995、63-64 頁
- 15) 前掲、丸山「日本におけるナショナリズム」、67 頁
- 16) 前掲『加藤周一自選集第 2 巻』
- 17) 前掲『加藤周一を 21 世紀に引き継ぐために』、37 頁
- 18) 前掲、丸山「日本におけるナショナリズム」、67 頁
- 19) 『思想』第 372 号、岩波書店、1955、1 頁
- 20) 『世界』第 107 号、岩波書店、1954 年、26 頁
- 21) 同上、27 頁
- 22) 前掲『加藤周一を 21 世紀に引き継ぐために』、160 - 161 頁
- 23) 加藤周一『私にとっての 20 世紀』、岩波書店、2000、114 - 115 頁
- 24) 前掲『加藤周一を 21 世紀に引き継ぐために』、29 - 30 頁
- 25) 「作家との対話—中村眞一郎—民衆の夢を追うて」、『ESPOIR』1、エスポワール編集室、1952、52 頁
- 26) 桑原武夫『文学入門』、岩波書店、1950、122 頁
- 27) 前掲『加藤周一著作集』、23 頁
- 28) 亀井勝一郎「日本の新しい背骨」、『現代随想全集第 19 巻』、創元社、1954、293 頁
- 29) 加藤周一「アメリカ・方法叙説」『文学と現実』、中央公論社、1948、237 - 238 頁
- 30) 加藤周一「私のヴァレリー」、『現代思想』第 37 巻 9 号、青土社、2009
- 31) ポール・ヴァレリー「アメリカ論——ヨーロッパ精神の投射」『ヴァレリー全集第 12 巻——現代世界の考察』筑摩書房、1968、102 頁。Paul Valéry, «L'Amérique, projection de l'esprit européen», *Regards sur le monde actuel et autres essais*。加藤は晩年の講演「私のヴァレリー」（『現代思想』第 37 巻 9 号）においてこれに触れる。

- 32) 加藤周一「西洋見物の途中で考えた日本文学」『雑種文化—日本の小さな希望—』、講談社文庫、1974、9頁
- 33) 前掲『加藤周一自選集第2巻』259頁
- 34) 加藤周一「日本からみたフランスとフランスからみた日本」『戦後のフランス』、未來社、1952、92頁
- 35) 前掲『加藤周一自選集第2巻』
- 36) 前掲、加藤「日本からみたフランスとフランスからみた日本」、95頁
- 37) 菊池とものヒルダ宛書簡については、整理作業にあたる落合優翼から示唆を得た。書簡は非公開。
- 38) 「立命館大学図書館／加藤周一文庫デジタルアーカイブ」<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2671055100>
- 39) 前掲『雑種文化—日本の小さな希望—』、8頁
- 40) 前掲『私にとっての20世紀』、114頁
- 41) 鷺巣力『加藤周一はいかにして加藤周一となったか』、岩波書店、2018、503頁
- 42) 今年度（21年度）より開始された、加藤周一現代思想研究センターによる立命館大学加藤周一文庫所蔵の書簡整理作業では、この船旅の間に加藤がヒルダに書き送った手紙が発見された（非公開）。
- 43) 竹内との対談について詳しく取り上げている論文として、矢野昌邦『加藤周一の思想・序説—雑種文化論・科学と文学・星莖派論争』（かもがわ出版、2005）や久保雄太郎『加藤周一の思想史的考察——その本質と軌跡——』（東北大学大学院文学研究科日本文学専攻2020年度博士学位論文）が挙げられる。
- 44) 鷺巣力はこの寄稿について『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』の「あとがき」において触れ、「一連の「雑種文化論」の嚆矢である」（452頁）と位置付ける。
- 45) 竹内好「ある挑戦」『竹内好全集第6巻』、筑摩書房、1980、180頁
- 46) 加藤周一、竹内好「ヨーロッパのこと日本のこと」、『日本読書新聞』、1955年4月4日
- 47) 前掲『加藤周一自選集第2巻』、4頁
- 48) 前掲「ヨーロッパのこと日本のこと」
- 49) 前掲『二〇世紀の自画像』、四五—四六頁
- 50) 孫歌「対談における加藤周一」、前掲『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』、329頁
- 51) 前掲「ヨーロッパのこと日本のこと」
- 52) 同上
- 53) 同上
- 54) 「日本文化の根——雑種的文化の問題」『愛媛新聞』1955年4月11日、8面「學藝」欄
- 55) 同上
- 56) 同上

- 57) 前掲「日本からみたフランスとフランスからみた日本」『戦後のフランス』、未来社、1952、92 頁
- 58) 加藤周一「日本の町」『展望』62 号、筑摩書房、1951、58—59 頁
- 59) <https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2671055100/2671055100200020/mp000455/?Word=%e6%b5%a6%e5%92%8c>
- 60) 前掲『加藤周一を 21 世紀に引き継ぐために』、39 頁
- 61) 半田侑子「加藤周一「青春ノート」から見るマチネ・ポエティック」(『感泣亭秋報 十四』、感泣亭アーカイヴス、2019) を参照。